

火遁の術

野村胡堂

一

「親分、良い陽気じゃありませんか。植木の世話も結構だが、たまには出かけて見ちゃどうです」

ガラツ八の八五郎は、懐ろ手を襟から抜いて、虫歯むしばが痛い——
て恰好に頬を押えながら、裏木戸を膝で開けてノツソリと入つて
来ました。

火遁の術

「朝湯の帰りかえ、八」

平次は盆栽ぼんさいの世話を焼きながら、気のない顔を挙げます。

「へッ、御鑑定ごかんてい通り。手拭が濡れているんだから、こいつは銭形の親分でなくたって、朝湯と判りますよ」

「馬鹿だなア、手拭は俺から見えないよ、腰へブラ下げているんだろう、——番太や権助じゃあるめえし、良い若けえ者が、手拭を腰へブラ下げて歩くのだけは止しなよ。見つともねえ」

「こいつは濡れているから肩に掛けられませんかよ、——いつか手に持って歩くと、不動様の縄じゃあるめえ、そんな不粋ぶすいな恰好は止すが宜い——って、親分に小言を言われたでしょう」

「よく覚えていやがる」

「しつけ駢の良い兎は違つたもので——」

「手拭をよく絞らないからだよ、なまこ海鼠のようにして歩くから扱
にくいんだ。第一その鬢がびんグシヨ濡れじゃないか、水入りの助六
が迷子になつたようで、意氣過ぎて付合いきれないぜ」

「あ、これですかえ。なるほど朝湯の証拠が揃つてやがる」

ガラツ八は腰からなまこ海鼠のような手拭を抜いて、鬢のあたりをびんゴ
シゴシとやりました。

「やけ自棄にこす擦ると、小鬢がは禿げ上がつて、劍術使いのようになるぜ」

「鬢のほつれは、枕のとがよ——と来た」

「馬鹿だなア」

平次は腰を伸ばして、暫くはこの楽天的な子分の顔を享樂して居りました。

「ところで親分」

「何んだい」

「不動様で思い出したが、今日は道灌山どうかんやまに東海坊が火伏せぎょうの行をする日ですよ。大變な評判だ、行って見ませんか」

「御免蒙ごうむろうよ。どうせ山師坊主の興行に極っているようなものだ。行って見るとまた飛んだ殺生をすることになるかも知れねエ」

平次は御用聞のくせに、引込み思案で、弱気で、十手捕繩にモノを言わせることが嫌で嫌でならなかったのです。

「火伏せの行だから、火難除かなんけになりますよ」

「家は借家だよ。焼けたって驚くほどの身上しんしょうじゃねえ」

「呆れたもんだ——家は借家でも、火の車には悩まされ続けでしよう。こいつも火伏せの禁呪まじないでどうかかなりやしませんか」

ガラツ八は自分の洒落しゃれに堪能して頤あごの下から出した手で、しきりに顔中を撫で廻しております。

「成程、そいつは耳寄りだ。火の車除けの有難いお護符まもりが出るとは知らなかったよ。ブラリブラリと行って見ようか、八」

「有難てえ。今日の道灌山はうんと人出があるから、何んか面白いことがあるような気がしてならねえ」

「火除けの行だから、キナ臭かったんだろう」

「違げえねえ」

道灌山へ平次と八五郎が向つたのは、悠々ゆうゆうと昼飯を済ましてから、火伏せの行が始まるといななつう申刻時分には、二人は無駄を言いながら若葉の下の谷中道を歩いておりました。

二

術の遁火

東海坊しゅげんしゃというのは、そのころ何処からともなく江戸に現われた修験者しゅげんしゃで、四十五六の魁偉かいいな男でしたが、不思議な法力を持つと

噂されて、僅かの中に江戸中の人気を漂さらい、谷中に建てた堂宇は、小さいながら豪勢を極め、信者十万、日々の賽銭祈禱料、浅草の観音様をさえ凌しのぐと言われました。

東海坊の法力で、一番江戸の町人を驚かしたのは、如何なる難病も癒らぬことはないと言われた祈禱きとうでした。越後屋の隠居は三年越立たぬ腰が立ち、伊勢屋の息子は五年がかりの癆症ろうしょうがケロリと治って嫁を貰い、旗本三右衛門の奥方は、江戸中の医者に見放された眼病が平癒し、小梅の豪農小兵衛は、気が触れてあらぬ事を口走ったのが、拭うが如く正気に返って、谷中の堂に銅の大おお手洗鉢てらいばちを寄進したと言った比たぐいの噂が、風に乗って撒布さんぷされるよ

うに、江戸中へ広がって行つたのです。

その日東海坊は火伏せの行を修しゅうして、火事早い江戸の町人を救うと触れさせ、人家に遠い道灌山を選んで、火行の壇だんを築きずかせました。九尺四方白木しらぎの道場の正面には、不動明王の御像を掛けさせ護摩壇ごまだんを据すえ、燈明供物とうみょうくもつを並べ、中程のところに東海坊、白衣けさに袈裟けさを掛け、散らし髪とぎんに兜巾とぎんを戴き、揉みに揉んで祈るのです。壇の四方を取巻く群集信徒は、その数何千とも知れませんが、賽銭さんぜんの雨を降らせながらドツと声を併せて東海坊の修法しゆほうを讃仰するのです。

町方から取締りの役人は出ておりますが、外の事と違って、信

心に関する限り、幕府は放任政策に徹して、大抵のことは見て見ぬ振り。東海坊の軍師格で、その信者の一人なる浪人者御厩左門次が同じく東海坊の門弟で、用人を兼ねている定吉という白い道服の中年男とともに、群衆の整理、修法の進行等、一瞬の隙もなく眼を配っております。

時刻が移るにつれて、群衆の心理は夢幻の境に引入られる様子でした。護摩の烟は濛々と壇をこめて、東海坊の素晴らしい次低音だけが、凜々と響き渡るのです。やがて、

「それ——ッ」

壇上の東海坊が声を掛けると、壇の四方を埋めて人間の背丈け

ほどに積み上げた夥しい枯柴かれしばに油を注ぎかけて、護摩壇の火を取って移しました。

「ワ——ッ」

と唸りを生じた群衆の声と共に、壇をめぐる枯柴は燃え上がり、一挙に俄か造りの壇を舐なめます。

「今こそ、我が法力を知ったか」

壇の中央、焰の真ん中に立ち上がった東海坊は、高々と数珠を打振り打振り、虎髪こはつをなびかせて叱咤しったするのです。

「南——無」

群衆はこの奇蹟に直面して、唯感嘆の声を併せるばかり、中に

は大地に土下座して、随喜の涙を流す者さえあります。

枯柴は完全に燃えて、焰は壇を一杯に包むと、ここにまた思ひも寄らぬことが起りました。今の今まで、高らかに呪文じゅもんを称えて、その法力を誇示こじしていた壇上の東海坊は、何に驚いたか、急に壇上を駆け廻り、床を叩き、壇を蹴飛ばし、浅ましくも怒号する態ていが、渦巻く焰の間から、チラリチラリと隠見するのです。

「た、助けてくれ——ッ」

壇上に狂態の限りを尽す東海坊の口から、とうとう救いを求む

術の遁火　る声が漏れました。焰は壇上に這い上がって、修験者の白衣に移り、メラメラと袈裟けさを嘗なめ上がる様子が、折から暮れ行く道灌山

の草原の上に灰色の空を背景にして、あまりにもまざまざと見えるのです。

東海坊は焰に包まれて、犬の如く這い廻り、虫のように飛びました。が、石を積んで櫛かしの厚板を並べた床は、東海坊の十本の指が碧血へきけつに染れる努力まみも空しく、ビクともする様子はなく、四方に積んだ枯柴は、丈余の焰を挙げて、翅つばさがあっても飛び越せそうもありません。

山あふに溢るる善男善女は、唯もう『あれよあれよ』と言うばかり、今は尊い修験者さんじゆうに対する讃仰さんじゆうの夢も醒めて、恰さなら目まのあたりに地獄変相図を見るの心地。渦巻く焰と煙の中に、死の苦闘を続

る東海坊の浅ましい姿を眺めて、動きもならず動揺どよみ打つのです。

「親分」

「八」

銭形平次と八五郎は、たったこれだけでお互の思惑を読み合いました。

「水だ、水だ」

「早く火を消せ」

術の遁火
ガラツ八は青松葉の枝を折って、枯柴の火を叩くと、平次は壇の四方に用意した、幾十の手桶のうちの一つを取ってサツと猛火に水を注ぎかけました。

「それッ」

と群衆の中から加勢に飛出した若い者が、五人、八人、十人、その人数が次第に多くなると、自然命令者になった平次の号令に従って八方から猛火を消し始めたのです。

この仕事は相当以上に骨が折れました。山の上にあつた一つの井戸は大した役には立たず大火を焚たくために、役人の指図で用意した手桶の水も、間もなく尽きてしまいました。多勢の

熱心に助けられたのと、燃え草が枯柴かれしばで、他愛もなく燃えきつて

しまったので、四方あたりが雀色すずめいろになる頃までには、どうやらこうやら

火を消してしまつて、平次と八五郎は、掛り同心永村長十郎、土

地の御用聞三河島の浅吉等といっしよに、焼跡の護摩壇ごまだんに検視の足を踏込んだのです。

その時、群衆はもう大方散つて、残るのは東海坊の弟子たちと、世話人数名と、火を消すのに手伝つた、丈夫な男たちが二三十人だけ。暮色は四方をこめて、燃え残る薪まきがあちこちに煙をあげております。

三

「あッ、人が——」

真先に壇の上に飛上がった三河島の浅吉は立ち縮すくみました。

「東海坊じゃないか」

永村長十郎が続きます。

「火伏せの修験者が焼け死んだぜ、親分。こいつア——」

「馬鹿ツ」

平次に睨まれて、ガラツ八は危うく口を緘とぎしました。放って置いたら——こいつア大笑いだ——とでも言ったことでしよう。

「法力が足りなかったんだ、可哀想に」

年配者の浅吉は、東海坊に同情を持っている様子です。

四方に暮色が迫ったので、提灯を呼びました。そうでもしなけ

れば、半分焼けた壇は、足許が危なくて、うっかり歩けません。枯柴の火は大方消えて、壇を取巻く数十の好奇の眼は、なかなか立去りそうもなく、固唾^{かたず}を呑んでことの成行きを見ております。

火遁の術



©2017 萩 袖月

「法力なんてものは、最初からなかつたんだよ、あにき兄哥」

平次は壇の上を一と廻りすると、静かに顔を挙げました。

「そいつは銭形の——」

浅吉は講中の一人であつたらしく、平次の言葉に不平らしい様子です。

「これを見るが宜い。床はガンドウ返しになつて、煙が一パイになつた時、東海坊はそつとスツポンへ抜ける仕掛けだつたのさ」

「えッ」

「そいつが、何んかの弾みで開かなかつたんだ。はず東海坊が火に追われながら、床板ばかり気にすると思つたが、こいつだよ」

平次が指さした。

提灯を突き付けると、なるほど床板には二尺四方ほどの鋸のこが入って、何にかの仕掛けで開くようになっていたのが、嚴重に締ふっていて、叩いても踏ふんでも開きそうになかったのです。

「フーム、天罰てんぼつだな」

永村長十郎は唸うなりました。長いあいだ愚民を惑まどわしていた修験者が、命がけの詭計きけいに失策して、猛火の中に死んだのも、江戸御府内の静謐を念としている長十郎にとっては、全く天罰としか思われなかったのでしょう。

「呆れた野郎だ」

浅吉はたった一ぺんに愛想が尽きた様子で、ペツ、ペツと唾つばを飛ばしております。

一刻の後には弥次馬もすっかり散り、永村長十郎も「東海坊の弟子どもや世話人一統とうは追つての御沙汰を待つように」と不気味な言葉を残して引揚げました。

「親分、帰ろうじゃありませんか。天罰なんか縛れやしませんよ」
ガラツ八は大きな欠伸あくびをしながら言います。

「腹が減ったんだろう。——此処じゃろくな水も呑めやしねエ。
谷中へ行って何にか詰めて来るが宜い」

平次は焼け残る壇の上から動こうともしません。

「親分は？」

「腹なんか減らないよ、——俺はもう少しここに頑張つて、その天罰野郎の面を見て行きてえ」

「それじゃ、親分？」

「大きな声を出すな、その辺にはまだ多勢いるんだ」

「あつしも手伝いますよ、親分。そう聴くと、腹が一杯になるから不思議で——」

「そう言わず行つて来るが宜い。帰りには鳶頭とびがしらの家へ寄つて、道具を借りて来るんだ。梃てこと槌つちと鋤すきだ」

「何をやらかすんで、親分？」

「この下に天罰が居そうなんだよ」

平次は暗がりの中で床板を指しながら、ガラツ八に囁くのでした。

八五郎はいろいろの道具を借りて、すぐ引返して来ました。斯うなるともう、腹の減った事などを考えては居られなかったのです。

「親分、何をやらかしゃ宜いんで？」

ガラツ八は七つ道具をドタリとおろしました。

「ゆかいた床板をは剥ぐんだ。かし櫛の木で、やけに丈夫だから、道具がなくちゃどうにもならない」

「三河島の親分は？」

八五郎は板の隙間に梃てこを打ち込みながら、この容易ならぬ労作を手伝わせる相手を物色します。

「弟子と世話人を見張っているよ。あの中に天罰野郎がいるかも知れない」

平次は独り言のように言いながら、梃の先をグイと押ししました。

「あつしがやりますよ、親分。提灯を持っていて下さい」

「頼むとしようか。何にか飛出したら、構うことはねエ、存分に縛り上げてくれ。お前の手柄にしてやるから」

「へッ、脅おどかしちゃいけません」

「大丈夫だよ、其処から何んにも飛出しやしない」

「自棄やけに頑丈ですぜ、親分」

そんな事を言いながらも金槌かなてこのお蔭、二枚の板はすぐ剥げました。

「なるほど、龕燈返がんどうがえしの仕掛けを、下から石と材木で塞ふさいだんだ

——思つた通りだよ、八」

平次は提灯を突きつけます。

「入って見ましようか」

「そうしてくれ、その材木を取払ったら身体くらいはもぐるだろ
う」

「提灯を貸して下さい」

「そら」

八五郎は提灯を片手に、床下の穴の中へ潜り込みました。横穴は思ったより深いらしく、暫くすると灯が見えなくなつて、それっきり八五郎は帰つて来ません。

四

「親分」

遠くの方から八五郎の声が筒つつぬ抜けます。

「何んだ、八」

「穴の中で提灯が消えたから、引返そうかと思つたが、忌々しいいまいまから手探りで真っ直ぐに行くと、変なところへ出ましたぜ」

「茶店の床下だろう」

平次は何の気取もなく、こんな事を言うのです。

「へッ、どうしてそんな事が？」

「近くて、人目に隠れて、穴の中へもぐり込めるといふ場所は外ないよ」

「さすがは親分だ。あつしは地獄の三丁目かと思ひましたよ。どうかしたら、閻魔の屋敷の雪隠せっちんの床下かも知れないと思つて這い

出すと、眼の前に燃え残りの護摩壇ごまだんが見えるじゃありませんか」

ガラツ八の話は手振りが交りました。

「怪談ばなしは後で聴くとして、それで、大方解ったよ。修験者東海

坊は、やはり人に殺されたんだ」

「へエ?——」

「火伏ひぶせの行ぎょうとか何んとか言つて、さんざん賽銭さいせんと祈禱料きとうりょうをせしめ

た上、四方から火を掛けさせ、煙が一パイになつた時を見測らつ

て護摩壇の抜け穴から、茶店の床下へ抜ける筈だつたんだ。そい

つを仕掛を知っている者に狙ねらわれて、床下から龕燈返しふさを塞がれ、

多勢の見る前で焼け死んでしまったのさ。天罰と言えば天罰だが、

この天罰は少しタチが悪い」

平次の説明して行くのを聴くと、東海坊が詭計きけいの裏を搔かれて、猛火の中に死んだ経緯いきさつ、一点の疑いもありません。

「その天罰野郎は何奴どいつでしょう、親分」

「あの中に居るよ。——行つて見ようか、八」

平次とガラツ八は、そこから少し離れて、虫聴き台の捨石や床几しょうぎに思い思いに腰を掛けて、三河島の浅吉の監視の下にいる十五六人の人数に近づきました。

「どうだい、銭形の」

浅吉の口吻くちぶりには、少しばかり挑戦的なものがありました。

「東海坊はやはり殺されたに違げえねえ。抜け穴を下から塞ふさいだ奴がいるんだ」

「へエ、そいつは本当かい」

浅吉は改めて提灯をかかげて、世話人や弟子達の顔を見廻しました。夜風のせいにか、男女取交ぜ十幾人の顔は、心持緊張して、さぐ 捜るような瞳が、お互の間をせわしく往復します。

「谷中の堂へ引揚げようか、此処じゃ調べもなるめえ」

「よかろう」

平次と浅吉は、土地の下っ引に死骸と焼跡の監視を頼み、掛り合いの十幾人には因果いんがを含めて、そこからあまり遠くない東海坊

の堂まで引揚げさせました。

いかにも急造らしい小さな堂ですが、豪勢な調度や、金色燦然さんぜんたる護摩壇は、いかにも流行の神らしく、白痴脅かしこけおどのうちにも、人を圧する物々しさがあります。

「兄哥は暫く見て居てくれ。俺がちよつと小手調べをして見るから」

「宜いとも」

平次の謙遜けんそんな調子に気をよくして、浅吉は先輩せんぱいらしく本堂の奥に頑張りました。そこから居流れて、弟子世話人たち十五六人、平次と八五郎はそれを挟んで左右に控えます。

「一番弟子とか何んとか言うのは誰だい」

平次は一座を眺め渡しました。

「私でございます。東山坊と申します」

白い物を着ておりますが、髪形かみかたちも俗体の四十男が膝を直します。少しず狡るそうな、シヨボシヨボ眼と、大きな鼻を持った男です。

「親の附けた名があるだろう」

「定吉と申します。へエ、生れは行徳ぎょうとくで、親は網元でございます

た」

「道楽に身を持崩して、東海坊の弟子になり、大法螺おおほらの合あいづち槌ちを

打つてトウセンボウとか名乗つたんだらう」

「へエ——」

日頃にもない平次の舌の辛辣さ、しんらつ定吉の東山坊は面目次第もな
く頭を下げました。

「その次は？」

「拙者だ」

昂然として顔をあげたのは、ちよつと良い男の浪人者御厩左門こうぜん
次でした。二十七八、みなり身扮もそんなに悪くはなく、腕っ節も相応
にありそうです。

「お名前は？」

「御厩左門次、俗名だけしかない。俺は用心棒で修験者ではないからだ。主人のお名前は勘弁してくれ、——身を持崩して東海坊のところ^{でたらめ}に転げ込んだが、東海坊の出鱈目^{おおほら}な大法螺に愛想を尽かして近いうちに飛出すつもりだったよ」

御厩左門次自棄な苦笑いをして居ります。

「どんな法螺で？」

「火伏^{ひぶ}せの行^{ぎょう}だって、本人は火遁^{かとん}の術のつもりさ。する事も言う

ことも皆んな法螺だ。——尤も病気だけは不思議によく癒^{なお}したが、

癒^{なお}っても後で金を絞られたから、丈夫になっても楽じゃあるまい」

「ところで、外に弟子はないのか」

平次は鉾を転じて、不安におののく十数人を見やりました。

「あとは子供と女ばかりですよ」

定吉の東山坊は、そう言いながら、二人の子供と二人の女を指さしました。二人の小僧はどっちも十二三で、物の数でもなく、二人の女はこんな邪悪な修験者にあり勝めかけの妾で、一人はお雪と言つて二十七八、一人はお鳥と言つて二十三四、二人とも恐ろしく派手な風をしておりますが、病身らしく蒼ざめて、相当の力を要する、護摩壇ごまだんの下の細工などは出来そうもありません。

信徒の総代——世話人と呼ばれているのは二人、一人は下谷一番と言われた油屋で、大徳屋徳兵衛。もう一人はこの堂を建てた

大工の竹次、二人とも五十前後、町人と棟梁とくりようで肌合は違いますが、物に間違いのありそうもない人間です。

「どうして東海坊の世話方になったんだ」

平次の問いに対して、大徳屋は口を開きました。

「娘が長年の病気を治して貰いました。嫁入前の十九でございませす。その御恩報じに、番頭と一緒に先達せんだつ様の御世話を引受けております」

「娘は？」

「これに参っております。菊と申します」

徳兵衛の後ろに小さくなつて居る娘——八方から射す燈明の

中に浮いて、それは本当に観音様の化身けしんではないかと思ひました。少し華奢ぎやしやで弱々しく見えますが、多い毛の緑も、細面の真珠色も、この世のものとも思えぬ気高さ——『よくもこんな美しいものを生んだことかな』と、もう一度父親の顔を振り返って見るほどの美しさです。その後ろに小さく控ひかえたのは番頭の宇太松、これは二十七八の至って平凡な正直そうな男でした。

つづいて棟梁とうりょうの竹次は何の巧たくみもなく、

「あつしの疝痛せんつうと、女房の腰痛を直して貰いましたよ。それから御恩返しにいろいろ働いて居るだけの事で、へエー」

至って無技巧にそんな事を言うのです。つづいて父親を癒して

貰ったという、越後屋の倅、女房の氣鬱きうつが治った小梅の百姓小兵衛、等々、なんの不思議もありません。

「東海坊の祈禱で治らない者もあつたらう」

平次は妙な事を訊きました。

「業ごうの深いのは癒らないとされております。例えば御徒町の伊勢屋の利八さん、これは喘息ぜんそくがどうしても治らず、先達様を怨んでおりました」

一番弟子の定吉は応えました。

「その利八は今日来て居たのかな」

「顔が見えました。それから門前町の文七、倅の文太郎は七日七

夜の祈禱きとうで百両もかけたのに助からなかつたと、先達様の悪口を言い触らして居ります。今日も来て居たようですが、先達様が火の中で死んだと解ると、底の抜けぬけるような大笑いをして帰りました」

定吉の話で、東海坊の法力なるものの正体と、それを困める恩怨の渦が次第に判るような気がします。

「ところで、護摩壇の下の抜けぬ穴だ。あれを知らなかつたとは言わさない。誰と誰が知っていた」

「――」

定吉と左門次は顔を見合せて黙り込んでしまいました。

「それくらいの事は言えるだろう。誰と誰が抜け穴のあることを知っていたんだ」

「――」

頑固がんこな沈黙がつづきます。

「親分さん」

「あ、大徳屋さんか」

「私から申しましょう」

大徳屋は静かに膝を進めます。

五

「え？ お前さんが知っているのかい」

平次も少し予想外でした。世間の噂では、娘の病気は治ったが、それから東海坊にだまされて、下谷一番という身上しんしやうの半分は痛めたりうと言われる大徳屋徳兵衛は、言わば東海坊に取っては、大事なだまし相手で、このお客様に抜け穴の秘密を知らせる筈はないうように思ったのです。

「御不審は御尤ごもつともですが、先達様——東海坊様は、そんな気の小さい方じゃ御座いませんでした。——俺は知つての通りどんな病気でも直す力があるんだから、諸人助けのために、少しは細工も

する、皆んな手伝つてくれ、——とこう仰つしゃつて、ここに居るほどの人数は、大抵抜け穴のことを聴かされております。定吉さん、御厩様、それに棟梁も、越後屋さんも——」

徳兵衛は一座を見渡しながらも指を折るのです。誰も抗弁するものはなく、合槌あいつちを打つものもありません。

「そう打ち明けてくれると大変有難い。——ところで、あの騒ぎの真つ最中——というよりは、壇の四方に火を掛ける頃、これだけの人数は大抵顔を揃えて居たことだらうな」

「——」
十幾人顔を見合せて、お互に探り合いました。

「騒ぎの真つ最中といつても、東海坊が壇に登つてから、かれしほ枯柴に火を掛ける迄だ」

平次は注ちゆうを入れます。

「親分、その前にがんどうがえ龕燈返しの仕掛けを塞ふさぎやしませんか」
ガラツ八はそつと袖を引きました。

「いや、仕掛けに變りのないことを見窮みきわめずに、東海坊は火を付けさせるものか。曲者が穴にもぐり込んだのは東海坊が壇に上つてから枯柴に火をかける迄の間だ」

平次の言うことは自信に満ちて居ります。

「確しかとしたことは判りませんが油を掛けたり、火を付けたり銘々

受持があつて、ちぐはぐにならないようにしますから、私共二人
ずつ四方に分れて居りました。私と御厩様、越後屋さんと大徳屋
さん、棟梁と小兵衛さん宇太松さんと五郎次さん——」

定吉は指を折りながら説明するのです。

「祈禱がきかなくて、東海坊の悪口ばかり言つて歩いたという門
前町の文七と伊勢屋の利八は、抜け穴の事を知らないだらうな」

「さア、そこまでは解りません。何分そんな事は一向気にかけるな

い東海坊様でしたから、火伏ひぶせの行などと言つて諸人を騙だますのは、

言わば火遁かとんの術で、衆生濟度しゅじょうさいどの方便だと思ひ込んでいらつしやい

ました」

定吉の説明する、東海坊の人柄はますます怪奇です。狂信者型の人間には、そんなのもあるのか知らと銭形平次も首を傾けました。

「ところで、皆んなの手を見せてくれ」

咄嗟とっさに平次が合図をすると、八五郎と浅吉が手を貸して、十数人の掌てのひらを三方から調べ始めました。

「あわてて拭いたって、追っ付くかい、馬鹿野郎ッ」

越後屋の番頭の五郎次は、したたか浅吉に頬ほおを殴られて、キョトンとして両掌を挙げました。

一人一人調べて行くと、嘗なめたように綺麗なのは、一番弟子の

東山坊こと定吉と、御厩左門次と女たち。泥と炭でひどく汚れているのは、大徳屋の主人徳兵衛と、棟梁の竹次。あとの五六人は薄汚い程度で、格別、炭も泥も附いては居ず、洗った様子もありません。

「洗ったのか」

平次は定吉の顔を見詰めました。

「へエ、ひどく汚れましたので」

「俺も洗ったが、悪いか」

御厩左門次は、何にか突っかかりそうな物言いです。平次はそれを取合わず、

「八、こんどは着物だ、手伝ってくれ」

「さア、一人ずつ立って見ろ」

おびただしい燈明の前に、一人ずつ立たせました。

定吉も左門次も、徳兵衛も竹次も、火を消すのに手伝って、少しづつは着物が汚れておりますが、狭い抜け穴を潜ったと思われ程のではありません。わけても汚れているのは定吉で、いちばん綺麗なのは身だしなみの良い徳兵衛です。

六

それから五六日、銭形平次は八五郎以下の子分や下っ引を動員して、定吉、左門次、徳兵衛、竹次、文七、利八、その他関係者を洗いざらい調べ抜きました。

日頃の行状、金廻り、東海坊との関係、一つも漏らしません。抜け穴の仕掛けの下に石と材木を積んだのは、咄嗟とっさの間の細工で、女や子供には出来ない芸と睨み、調べは専ら男もっぱに集中しましたが、それでも、東海坊をめぐる女の一群に関心を持たない平次ではありません。

東海坊という修験者は、経文一つ読めないような、無学鈍根どんこんの男ですが、生得不思議な精神力の持主で、——今日の言葉で言え

ば、自己催眠さいみんという類のものでしよう。憑依ひょうい状態になつて熱禱をこめると、気の弱い信者達の病気は、不思議にケロリと癒るのでした。

この種の邪教的な気根の持主らしく、東海坊も女犯にかけては、大概の醒臭坊主なまぐさに引けを取らず、妾二人たくわを蓄えてる外、講中の誰彼に手を出して、絶えず問題を作りますが、そんな不始末は不思議なことに狂信者達を驚かさなかつたのです。

「親分、三河島の親分は、とうとう挙げて行きましたよ」

ガラツ八の八五郎は、息を切つて飛込みました。事件があつてから七日目の朝です。

「誰だ、文七か、利八か」

平次も少しけしき気色ばみます。

「一番弟子の定吉ですよ。——近頃あの野郎にも人気が出たから、師匠の東海坊が死ねば、そっくり跡を継いでうまい汁が吸えると
思ったんでしよう」

「そいつは三河島のあにき兄哥の見当違いだ。定吉は東海坊の介添えて、
壇の正面を一寸も離れなかった」

「でも、かれしぼ枯柴へ油をかけて火をつけた時は、皆んなそれに気を取
られて、定吉が居なくなっても、ほんの暫くなら気はつきません
よ」

「八、お前にしちやうまい事を言ったぜ。火をつけた時は皆んなそっちへ気が外れるから、定吉なんかにも目もくれる者はない——とね、成程それに違いない」

平次は妙なところへ感心しました。

「——お前にしちや——は氣に入らないね、親分」

「贅沢を言うな、それで沢山だ。——定吉に氣がつかないくらいだから左門次にも、徳兵衛にも、竹次にも氣がつかなかったわけだ。待てよ、東海坊が壇に登って、薪まきに火をかける前に、曲者が穴へ潜り込んだと思ったのは俺の間違まちがいかな」

「親分、感心して居ちやいけません。それじゃ、定吉が下手人で

すかい」

「いや違う。定吉は変てこな白い着物を着て居た。あの扮なりじゃ穴へ潜れない、手を洗ったのは一応臭いようだが、本当に穴に潜った奴なら、手を洗うと却かえつて疑われるくらいのことには気が付くだろう。曲者は手を洗わない奴だ」

平次の推理は微びに入り細うがを穿ちます。

「それじゃ、あの浪人者も？」

「あれは怪しい。が、腕が出来そうだ。東海坊が気に入らなきや、細工をせずに斬って捨てるだろう」

「なるほどね」

「東海坊の祈禱がきかなくて、一人ツ子に死なれたという、門前町の文七が一番怪しい。あの日何処に何をしていたか、——近ごろ東海坊の悪口を言わなくなったか。そんなことをよく聴き込んで来てくれ——」

「そんな事ならわけはねエ」

「あ、ちよつと待った八。それからもう一つ、あの日道灌山どうかんやまへ、大徳屋徳兵衛は夏羽織なつばおりを着て来なかつたか、それを訊いて来てくれ」

「へエ——」

ガラツ八の八五郎は何が何やらわけも解らず、闇雲に飛出して

しまいました。

「お静、羽織を出してくれ。ちよつと下谷まで行って来る」

何時にもなく羽織を引っかけた平次、それから下谷一円を廻つ

て髪結床、湯屋、町医者と、根気よく訪ねました。
かみゆいどころ

日が暮れて帰って来ると、八五郎は一と足先に戻って、——待人来たらず——を絵で描いたように、入口の格子に凭もたれて頤を長くしております。

「あ、親分。待ってましたぜ」

飛付くような調子。

「嘘を突きやがれ。一と足先に帰ったばかりじゃないか」

「どうして、それを」

「路地の口へ干したカキ餅を引っくり返されて、煎餅屋せんべいやのお神さんブウブウ言いながら、半分くらい拾い込んだところへ俺が帰ったんだ。あんな粗相をするのは、この路地の中に一人も住んじや居ないよ」

「へッ」

八五郎まさに一言もありません。

「ところで、何を拾って来た」

「下手人は門前町の文七に違いありませんよ、親分。あの日道灌山へ行っていたことは皆んな知っているし、護摩壇ごまだんの下に抜け穴

のあつたことも、前から知って居たつて本人が言うそうですよ」
「それから」

「今でも滅茶滅茶に東海坊の悪口を言つて歩きますよ。あの野郎が焼け死んだのは天罰だ。てんぼつもう三月も生きていたら、この文七が殺す筈だった——つて」

「三月は妙に刻きやくんだね」

「無尽の金が取れるから、東海坊を叩き斬つた上、俵の骨を持つて高野山へ行く気だったそうですよ。自分が下手人だと白状しているようなものじゃありませんか」

ガラツ八は勢い込んで説明をつづけます。

「それつきりか」

「これつきりでも縛れるでしょう、親分」

「よし、よし、文七は無尽の金が取れるまで逃げるような心配はあるまい。まずそれは安心として置いて、——ところで、大徳屋はあの日夏羽織を着ていたのか」

平次は夏羽織の方に気を取られて居る様子です。

「着て居たそうですよ。多勢の人が見て居まさア。小紋の結構な羽織で」

「谷中へ引揚げた時はそれを着て居なかつたね」

「へエ——」

「それで解った。八、一緒に来ないか、面白いものを見せてやる」

「どこへ行くんで、親分」

「どこでも宜い」

平次は疲れた様子もなく、ガラツ八を伴つかれてまた下谷へ取って返したのです。

七

平次が訪ねて行ったのは、下谷一番と言われた、油屋の大徳屋でした。

「誰も聴いちや居ないでしょうな」

平次は煙管を出して一服つけると、静かにこう切り出しました。

「ここは離屋はなれで、誰も聴く筈はありません。娘も奉公人も母屋おもやで、

廊下を人が来るとすぐ知れますよ。——一体どんな御用で、親分？」

物々しい空気に圧倒されて、徳兵衛の唇の色は少し変りました。
が、大店の主人らしい鷹揚さは失わず、おおだなどんな事を言い出されても驚くまいとするように、膝に置いた手は、ひし犇と単衣を掴んでおります。

「外ではない。——東海坊を自滅させたいきさつ、あっしは皆ん

な知っているつもりだ。が、なろう事なら本人の口から言っ
て貰い度^たい」

平次の言葉はこの上もなく静かですが、釘を打ち込むように相
手の肺腑^{はいふ}に響く様子です。

「それは？」

「いや、弁解は無用だ。——言いにくければ、あつしが代って言
おう。いきなり縛って突き出すのはわけもないが、聴けば娘のお
菊さんの婚礼が、明日に迫って居るといふ話。その前の晩に縄付
を出しちや気の毒だと思ふから、わざわざやって来たようなわけ
さ」

「親分さん」

「大徳屋さん。——あつしは下谷中を駆け廻って、七日の間にこれだけの事を搜り出した。違っているなら違っていると云って貰い度い。——大徳屋の一人娘下谷小町と言われたお菊さんは、父親の手一つで育ったが、何んの因果いんがか二つの疾やまいがあった。一つは癩癩てんかんで、一つは——これは言わない方が宜い。若い女にはこの上もない恥かしい病気だ」

「——」

「あらゆる医者にも診せ、加持祈禱の限りを尽したが、十九の春までどうしても癒らなかつた。嫁入りも婿取りも諦あきらめていると、

江戸で五番とは下らぬ大町人室町の清水屋総兵衛の伴総太郎が見染めて、ひとほしか人橋架けて嫁にくれるか、それがいやなら、持参金一万両で聳に来て宜いという話だ。当人のお菊も親のお前さんも乗気になった。この縁を逃してなるものかと思つたが、悲しいことにお菊には人に明かされない病氣がある」

「――」

徳兵衛は深々と首を垂れて、平次の論告を聴き入るばかりです。

「フト人の噂で聴いた東海坊の祈禱、これを頼むと不思議に験げんがあつて三月経たないうちに二つの悪病がケロリと癒つた。お前さ

んも、お菊も、天にも登る喜びで、さつそく婚礼の話を進めたが、

——どっこい、東海坊は自分の法力を諸人に知らせるために、癒した病人のことを、皆んな言い触らす癖くせがある——」

「これにはさすがに驚いた。危うく言い触らされそうになつて、幾度止めたかわからない。しまいには、百両、二百両、五百両と、鰻うなぎのほ上りに口止め料を取られ、下谷一番の油屋と言われた大徳屋の身上も、この儘で行つては年一杯も保たもちそうもない」

「もう一つ悪いことに、娘の病氣のことを言われ度くなかつたら、当人を谷中の堂へ奉公に出せ、——と東海坊が言い出した。それ

に相違あるまい」

「――」

平次の論告はここまで来ると一段落で、しばらく口を緘つぶんで、徳兵衛の出ようを見ました。行燈の燈芯はジ、ジと油を吸って、夏の虫はもう、庭で鳴いている様子。勢い込む八五郎の息づかいだけが異常に荒々しく聴えます。

「その通りでございます、親分さん。秘し隠したことをよくそれまでお判りになりました。全く恐れ入りました」

徳兵衛は畳の上に手を突いて、力が抜けたようにガツクリとお辞儀をします。

「で、抜け穴から入って、がんどうがえ 龕燈返しの仕掛けを塞ぎ、ふさ 東海坊を自滅させたというのだな」

平次はくり返して自滅という言葉を使いました。

「その通りでございます。火が燃え上がって、みんな壇の方に気を取られたとき、案内知った茶店の床下に飛込み、壇の下の穴の中に捨ててあった、石と材木の切れ端で仕掛けの下を塞ぎ、ふさ 大急ぎで出て来ると、誰も気の付いた者はない様子です。穴の中でひどく汚れた羽織は脱いで、畳んで娘の風呂敷の中に入れ、心にとがめられながらも、誰知るまいと思っておりました」

こんどは平次が聴手になりました。火が燃え上がってから、誰も気の付かない『時間』のあつたことや、夏羽織を気にしていた親分の慧眼けいがんを、今さらガラツ八は思い当つた様子です。

「親分さん、決して逃げも隠れもいたしません。——が、たった三日だけお見遁みのがしを願います。娘の祝言が済んでしまつたら私は——」

徳兵衛は悲痛な顔を挙げるのです。娘の祝言が済んだ後で自首して出たとして、その娘が無事に嫁入先に納まるでしょうか。

「それはむずかしい」

平次のむずかしいと言うのは三日縄を伸ばしてくれと云う言

葉に対するものではなかつたでしょう。

「東海坊が娘の病気を言い触らしたら、この縁談は破れるばかりでなく、娘は生きて居ないでしょう。そうかと言って、自分の子ながらあんなに綺麗に育つた娘を、獣物のような東海坊にくれてやる気にもなりません」

「よく解つた」

「親分」

「たった三日だよ」

平次は立上がりました。後ろには畳の上に伏し拝む徳兵衛、ロボロと泣いている様子です。

「八、行こうか」

「へエ」

廊下の嫁入りの調度の中へ、二三步踏み出した時でした。

「あれは、親分」

母屋おもやと離屋をつなぐ廊下の真ん中に坐って何やら蠢うごめく姿が、

遠い有明の灯に見えるのです。

「番頭じゃないか」

「お」

番頭の宇太松——まだ若くて働き者らしいのが、脇差を自分の腹に突立てて、のた打ち廻っているではありませんか。

「親分さん、——私だ。東海坊を殺したのは、この私、——宇太松でございますよ」

手負いは苦しい息を絞りました。

「何？ そんな馬鹿な事が——」

平次と八五郎は、宇太松を左右から抱き起しました。主人の徳兵衛も驚いて飛んで来ます。

「披け穴を塞いだのは、この私でございます——誰でもない、誰でもない。この、この、宇太松でございますよ」

尽きかける気力を振り起して、血潮の中にのた打ち廻りながら、宇太松はひたむきにこう言いきるのでした。

「宇太松。お前は、お前はまア。どうしたということだ」

大徳屋の徳兵衛は夢心地に突っ立ったきり、自分の代りになつて死んで行く気の、宇太松の動機さえ判らない様子です。

「旦那、——私は死んでも思い置くことはございません。あんな山師を自滅じめつさせて、諸人の迷惑を取除けば」

「よく判った。——番頭さん、何にか望みはないか」

平次は宇太松の耳に唇を寄せて、次第に頼み少なくなる氣力を呼びさしました。

「何んにもない——ただ、——お嬢様には、——何んにも言わな
い方が宜い。——お嬢様には、私が、私が、何んで死ぬ氣になつ

たということも、——お嬢様に」

言つてはならぬ恋を身に秘めて、宇太松は死んで行くのです。

「宇太松、——有難いぞ。お前のお蔭で——」

徳兵衛の言葉は涙に絶句ぜっくしました。

この騒ぎも明日という幸福な日を迎える興奮に夢中になつて
いる母屋のお菊には聴えなかつたでしょう。

三人は、息の絶えた宇太松の前に、黙りこくつたまま暫く頭を
垂たれて坐り込みました。長い長い人生のうちにも、滅多にこんな
厳げん肅しゆくな気持になる時間はないものです。

×

×

「可哀想なことをしたね」

帰り途、平次はガラツ八にこんな事を言うのです。

「あつしも泣いてしまいましたよ」

とガラツ八。

「番頭が腹まで切らなくたって、——俺は徳兵衛をどうして助けようか、そればかり考えて居たのに、——三日待つというのを、本当に取って、身代りに死ぬ気になったんだね。俺は三百年も待つ気だった」

平次は沁々しみじみと言うのでした。

「でも、あの番頭にしちゃ、生きている気はなかったかも知れま

せんぜ。お嬢さんが明日祝言だと聞いちゃ」

ガラツ八は妙に思いやりがあります。

「なるほどな、独り者は察しが良い。——あの娘は綺麗過ぎるから、自分の知らない罪を作っていたんだらう」

「それが親を助けることになるとは、変な廻り合せじゃありませんか」

平次は黙ってうなずきました。妙につまされる晩です。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

火遁の術

初出―「オール讀物」昭和十五年七月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第六卷
河出書房
昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>